

補習校経験者によるパネルディスカッションが開催されました！

12月9日（土）、アメリカの補習授業校に在籍した同窓生や保護者であり、日米経済を牽引する3名のゲストをお招きし、「時代を拓くグローバル人材とは？～日本語補習校出身者の歩みを振り返り、未来を志向する～」と題してパネルディスカッションが開催されました。本企画は、創立65周年記念事業の一環として行われたものです。



65周年記念パネルディスカッション
「時代を拓くグローバル人材とは？」

パネリストの吉村亮太さん（米州住友商社会社ワシントン事務所長・ワシントン日本商工会会長）は、小学4年生から中学2年生まで本校に在籍し、現在は商工会の会長として卒業式や運動会などの行事にもご臨席いただいています。井口徹夫さん（東芝アメリカ社ワシントン事務所長・ワシントン日本商工会財団理事長）は、幼稚園から小学3年生までニューヨークの補習校に在籍し、中学生で再び渡米した際には単身でアメリカに残る道を選ぶなどユニークな経歴の持ち主です。小林知代さん（Washington CORE, L.L.C. Co-CEO・ワシントン日本商工会財団理事）は本校の元保護者で、管理運営委員を務めた経験もあります。パネルディスカッションでは三者三様の視点をお聞きできた一方で、補習校で学ぶ生徒が持つスキルの重要性が度々話題に上り、未来のグローバル人材として生徒たちに大きな期待が寄せられているのが印象的でした。テーマごとにパネリストのコメントをご紹介します。



吉村亮太さん

日本語補習校での学びや経験について

吉村：日本語で話せる週1回の補習校が楽しみだった。寝袋持参で登校し、毎週授業後は友人の家に泊まりに行き交友関係を深めた。その中で、友人の保護者がロールモデルとなり、大使館・メディア・国際機関など友人の親の職業に影響を受け、商社マンを目指す道につながった。補習校の友人とは今でも交流が続いている。

井口：吉村さんとは真逆で、当時は補習校には通いたくなかった。土曜日は友人と遊んだり野球をしたりしたかった。しかし、帰国後、学校生活になじむのに苦労したため、補習校で日本の学校の雰囲気を経験したことが助けになった。後になって、そのために親が補習校に通わせたのだと理解できた。中学生で再び渡米したのち、自ら希望してマサチューセッツ州の全寮制の高校に進学するなど、その時々選択が現在につながっている。



井口徹夫さん



小林知代さん

小林：日本語学校では子供たち以上に保護者として楽しませてもらった。4人の子供たちはそれぞれ通った年数は異なるが、自身のルーツを知り、日本人の考え方が身に付いたのではないかと感じる。運営委員会の活動を通して、子供たちや日本の将来について考える機会となり、保護者の熱い思いで学校が成り立っていると感じた。夜遅くまで会議したのもよい思い出。

バイリンガル教育や異文化コミュニケーションについて

吉村：バイリンガル教育の第一関門は、日本に帰った後に英語が好きでいられるかどうか。そのためには英語の先生と良好な関係を築けるかどうかは重要。英語力維持のために、当時始まったばかりの二か国語放送を観たり、大学で必須でない英語の授業を取ったりしていた。バイリンガルより、「バイカルチャー」という言葉のほうが適している。日米で生活する中で、相手や環境によって自然に接し方のスイッチが切り替わっている。例えば仕事の交渉時に通訳をする際、話し手の意図をくんで咀嚼して伝えたりすることも大切。